

3月17日 「朝日新聞」より抜粋

東京大学名誉教授 前川和彦氏インタビュー

福島第一原発の事故が深刻な状況になっているのは事実ですが、少なくとも現時点では、多数の住民の健康被害につながるような状況ではないと考えます。

総量で100 ミシーベルト以上の放射線を浴びると、発がんの可能性が高まるなど将来的な健康被害が出るとされています。さらに、150 ミシーベルト程度で、男性の生殖能力の一時的な不全など急性の身体症状が起こり始めます。

3号機付近では1時間あたり400 ミシーベルトの線量を記録しましたが、あくまでも原発敷地内の観測値ですし、「1時間その場に居続けた場合、400 ミシーベルトの放射線を浴びる」という意味です。現場の作業員でもそんな危険な場所に長時間いることはありません。

作業員は、一般の住民に比べればはるかにリスクの高い環境で作業していますが、個人線量計を身につけ、被ばく線量の限度を決めて作業時間を限り、交代しながら作業をしています。爆発で負傷した作業員のように不測の事態が生じた時は別ですが、一般的にはリスク管理はできているはずですよ。

被ばくというと、1999年に茨城県東海村のJCOで起きた臨界事故の事を思い出す人もいるかもしれませんが。私はあの事故で被ばく・死亡した大内久さんの治療にあたりましたが、大内さんはウランが臨界反応を起こしたその場において、16～20 グレイという大量の放射線を浴びました。3号機付近に1時間いて浴びる放射線量の40倍以上を一瞬で浴びてしまったのです。

今回の事故は放射線が外部に漏れてはいますが、格納容器が爆発したわけではない。東海村の臨界事故以降、原発周辺にある医療機関の被ばく医療の体制も整いつつあります。

それに、400 ミシーベルトというのはあくまでも原発の敷地内での話であり、距離が離れるにつれて放射線の濃度は薄まります。今回のような事態で原発の健康被害を防ぐ最良の方法は避難することです。

すでに20キロ圏内に避難している住民には、将来の発がんを含めて今回の放射線による健康被害が出る可能性はありません。半径20～30キロ圏内の住民は屋内退避ですが、現代の家屋は密閉性が高く、屋内退避でも十分に被ばくを防ぐことができます。国や自治体の指示通り、不用意な外出を避けてください。

現時点では半径30キロ圏外の住民に健康被害上の問題が生じる可能性は低いと思われれます。今回、東海村で一時、1時間あたり5マイクロシーベルトと自然量の100倍の放射線量を記録しましたが、たとえ1時間その量の放射線を浴び続けても、健康被害が出るとされる100 ミシーベルトと比べれば、2万分の1の線量です。

「放射線を避けるため」としてすでに首都圏から離れる人が出始めているそうですが、不要だと思います。放射線の影響を受けやすいと言われる子供を含め、避難の必要はまったくありません。食料や水を買占める動きと同じで、社会不安をあおるだけです。冷静に出来る限り普段と同じ生活を送るのが最善だと思います。